

外部者の参入が山村過疎地域に与える活性化効果について
-生活スタイルの変化に着目して-

(株) 竹中土木 ○正会員 北尾 淳
鳥取大学工学部 正会員 岡田憲夫
鳥取大学工学部 正会員 小林潔司

1. はじめに

山間地域の過疎化は、同時に山村コミュニティの衰退をもたらしている。過疎化の進行に歯止めをかけるためには、コミュニティの基礎的機能を維持、回復させることが不可欠である。本研究では山村過疎コミュニティにおける小規模宿泊施設の整備プロジェクトに着目する。そして、域外のプロジェクト参加者が新しい生活スタイルをふまえた外部参入者としてコミュニティと関わりを持つことが、山村過疎地域の活性化に貢献し得ることに着目する。具体的には、鳥取県八頭郡智頭町八河谷地区を対象として、ログ・ハウス整備プロジェクトによる外部者の参入が、山村過疎地域に与える活性化効果について実証分析を行う。

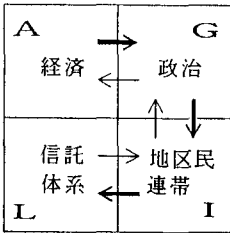
2. 山村コミュニティの変容過程

コミュニティの衰退という社会学的問題は、A G I L図式を用いて分析することが有効である。A G I L理論によれば、過疎化の現象は、A→G→I→Lという下方進行形のコミュニティ変容過程と、L→I→G→Aという上方進行形のコミュニティ変容過程として表現できる(図-1参照)。前者を過疎化の「順過程」と呼び、後者を過疎化の「逆過程」と呼ぶ。対象地区のようなタイプの山村過疎コミュニティの活性化を図るためには、L→I→G→Aタイプの進行に着目した社会開発アプローチが有効な場合もあり得る。

3. ライフスタイルの変化をふまえた山村コミュニティの活性化戦略

現代のような国際化、情報化社会では、一面において生活感覚やライフスタイルが大きく変わり得る時代と言える。住スタイルも変化していくことが予想され、従来の「定住者」(inhabitant)以外に、「半住者」(semi-habitant=ここではとりあえず、「毎年かなりの時間をその地域で過ごす人」と定義)や「漂住者」(trans-habitant=ここではとりあえず、「短期滞在や保養などにより毎年決って訪れる、いわば漂い住む人」と定義)に擬せられる外部参入者が増えることが予想される。この他に、例えば半住者は毎週1泊以上の滞在が必要であり、漂住者は1回の長期休暇に3泊以上の滞在か、あるいは月1回程度2泊以上の滞在が必要であるとも考えることもできる。なお、半住者と漂住者を併せて「準住民」と呼ぶ。

前述した、対象地区のようなタイプの山村過疎コミュニティにおいては、L→I→G→Aタイプの社会開発アプローチが有効な場合が多い。いま、Millsの集団の成長過程という概念を用いると、「半住者」はコミュニティのL、I、Gの機能要件に、「漂住者」はL、Iの機能要件に寄与する構成員であると定義できる。また、「定住者」とはA G I Lのすべての機能要件に関わっている人のことである。L機能要件の整備レベルを高めるには何らかの形でコミュニティの構成員が増えることが必要となるが、それは「定住者」のみでなく、「半住者」や「漂住者」に擬せられる外部参入者の増加も有効となり得る。



→ 下方進行過程(順過程)

→ 上方進行過程(逆過程)

4. 八河谷地区におけるケーススタディ

対象地区では、ログ・ハウス建築イベントによる小規模宿泊施設の整備が具体的な地域活性化戦略の1つとして捉えられる。イベント参加者や地区外転出者を対象としたアンケート調査の結果より、イベント参加者と地区外転出者の中に、現段階で「半住」、「漂住」し得る人々が存

図-1 A G I L図式を用いた過疎化の進行過程

在していることがわかった。アンケートの結果の概要を表-1に示す。

半住者、漂住者の域内への参入による地域コミュニティの活性化プロセスを、域内者と外部参入者との相互作用という視点から社会的に分析することとする。そのために本研究では、「Johariの窓」という概念図式に着目する。「Johariの窓」によれば、個人のパーソナリティには、自己には主観的に意識されない部分と客観的に他者から見えない部分があり、自己も意識しており他者からも見えるO (open) 部分、自己は意識しているが他者からは見えないH (hidden) 部分、自己には意識できないが他者には見えているB (blind) 部分、自己にも他者にも分からないD (dark) 部分という4つの窓ができあがる。そしてBとDを無意識層、HとIを潜在層と呼び、両者を合わせて深層と呼ぶ。

この図式に従えば、「Johariの窓」のO (open) の部分を広げることにより、その地域コミュニティはそれだけ開かれたものとなる。そこで、地区内住民と外部参入者に対するアンケート調査を通じて、イベント実施により外部参入者と域内住民の間にどのようなコミュニケーションがもたれ、域内住民、および外部参入者のO (open) の部分がどのように変化したかを、「Johariの窓」の概念図式を用いて分析した。その結果、水平の上下分割線が下向きに移動する一方、垂直の左右分割線が右向きに移動していることが判明した。具体的には、外部参入者からは、コミュニケーションを通じて「地区民に思わぬよい影響を与えている」等の意見がみられ、コンベンショナリズムが大きく緩和されていることがわかった。さらに「我々を生活者の一員として認めてほしい」等の意見もみられ、自我の防衛規制も以前と比べて大きく緩和されていることがわかった。つまり、O (open) の部分は以前と比べて相当に開かれた可能性がある(図-2 (a)参照)。一方の地区内住民は、「滞在したりしてもらうのは大歓迎である」等の意見がみられ、コンベンショナリズムは以前と比べて大きく緩和されていることがわかった。しかし、「自分が他の地域への半住者、漂住者になろうとは思わない」等の意見もみられ、自我の防衛規制は大きくは緩和されていないことがわかった。つまり、心の開き具合は外部参入者と比べて少し小さいといえる(図-2 (b)参照)。

今後はさらに地区内住民のO (open) の部分を広げることにより、コミュニティが開かれていくことが求められる。その結果、準住民の数も増加し、コミュニティのL, I, G等の機能が活性化されると考えられる。これによりさらに、 $L \rightarrow I \rightarrow G \rightarrow A$ 、 $A \rightarrow G \rightarrow I \rightarrow L$ の相互連動的な形で地域活性化が進行するものと思われる。

表-1 イベント参加者と地区外転出者の
ログ・ハウスの利用可能者数

	1泊	2泊	3泊	それ以上
毎週末に	2	1	0	0
隔週で	1	0	0	0
月1回程度	5	1	1	0
5月連休に	7	4	1	0
夏期休暇に	16	20	6	2
正月休暇に	2	1	2	1

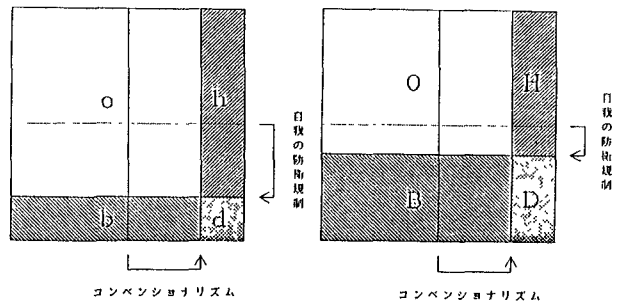


図-2 (a)外部参入者の O (open) 部分の開き方 (b)地区内住民の O (open) 部分の開き方

5. おわりに

今後の課題としては、コミュニティとの関わり方という側面から、外部参入者の役割とその影響を科学的に分析できるアプローチを確立していくことが必要である。また、今回は地区内住民と外部参入者とのコミュニケーションを想定したが、今後はその他に考えられるコミュニケーションパターンを想定した調査や分析を進めていく必要があろう。